

『イメージ課題中の F 波研究から臨床を考える』

2042 年をピークとして高齢者数が減少するのに対し、10 年後には理学療法士数は現状の 2 倍となる。これは、理学療法士数の飽和を意味し、理学療法士は危機感を持たねばならない。また、平成 30 年度の診療報酬改定の背景からも、国や患者はより早期の社会復帰を求めていることがわかる。理学療法士が、これらのニーズに応えるためには、的確な理学療法の実施と効果的な自主トレを提示することが重要となる。今回、この効果的な自主トレの 1 つとして運動イメージを提案する。

「練習時間の違いによって運動イメージが

運動の正確さと脊髄前角細胞の興奮性に与える影響は異なる」

関西医療大学 臨床理学療法学教室 福本悠樹

イメージトレーニングには個人差が認められることは多々報告されており、その要因も様々に報告されている。これらの機序は明確に捉えておく必要があるが、実はイメージトレーニングを実施する前にどのように運動練習させておくのか、それは練習を行わせる時間によっても左右されることが我々の研究により明らかとなってきた。効果の違いを脊髄神経機能の興奮性指標とされる F 波を用いて神経生理学的背景より解説していく。

「F 波の形が意味するもの」

関西医療大学 臨床理学療法学教室 東藤真理奈

脊髄神経機能の興奮性を示す F 波とは、複合活動電位であり様々な形の波形が出現することが特徴である。しかしながら、脳血管障害患者のように随意性が乏しい場合、この多様性が欠如し一定の形にて波形が記録されることが報告されている。そこで、今回 F 波の波形分析が筋緊張異常の客観的評価として用いられる可能性も踏まえ、解説していく。

「複合運動の運動イメージが脊髄運動神経機能の興奮性に与える影響」

研医会 田辺中央病院 松原広幸

運動イメージが脊髄運動神経機能の興奮性に与える影響は多々報告されている。報告されている運動イメージの課題としては、手指や肘関節、肩関節とそれぞれの関節に分けた課題設定でおこなわれている。しかし、日常生活動作では、これらの関節運動が協調的に役割をはたす必要がある。そのため、上肢での日常生活動作の改善を目的に、上肢での複合的な運動イメージが脊髄運動神経機能の興奮性変化に与える影響を解説していく。